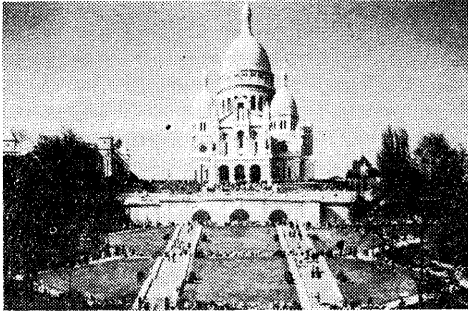


ヨーロッパの旅



サクレキユール寺院

パリーの滞在は、二回とも一週間足らずの日程しか組むことが出来なかった。

パリ在住の友人に、最も有効な見物のプランをたててくれるよう依頼したが、一月あっても足りるものではないという返事であったので、私は将来再び訪れる日に見残したのを見ることにして、足の赴くままに市のあるところを歩くことにした。

平井信義

今、思い返してみると、そうして一人歩きをした土地の印象は、不思議に強く残っている。好きなところに立止り、あるいは疲れを休めてたたくみ、カフェーの椅子に腰を下して一とグラスの葡萄酒に頬を染めながら、行き交う人々の顔々や足並みを眺めた時の印象は、刻明に脳裡に浮んでくる。ところが、行く先々で縁故を求め、その方々の御好意の自動車で案内をしてもらった土地の印象は、どうしてこう醜ろなのであろう。

一人歩きの楽しさ、かなしさ、私の懐には、いつも芭蕉の「奥の細道」が入っていた。鹿島立ちの時に、恩師齋藤文雄先生から頂いた岩波文庫本であった。高校生の時以来あれ程親しんだ紀行文であったのに、ヨーロッパに滞在中には、なかなかそれを取り出して読む気にはなれなかった。たまたま読み始めてみても、二、三頁読み進むにつれて、つい投出してしまふことが多かった。

自分のいるヨーロッパという場所が、観察に徹した芭蕉の気持ちを受けつけないのではないかと思ったり、私自身の気持がおちつけない状態にあるからではないかと思ったりした。とにかく、よみさしの文庫本の間には横文字の紙片がはさまれて、それはしばらく机の上におかれたままになっていたのである。

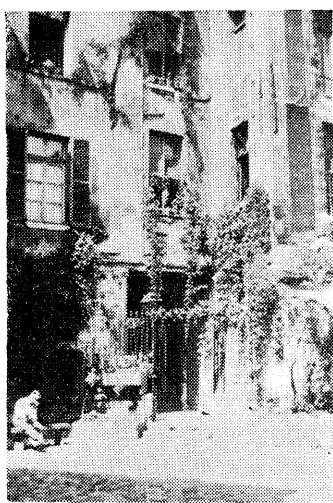
しかしながら、ヨーロッパの旅のあれこれを出すとき、特にとぼとぼと一人歩きをした時の思出が蘇ってくると、きまpping「奥の細道」を迎る芭蕉の姿が、影のごとくつきまとってくるのである。飛行機も自動車も、人力車さえもない時代に、頼る交通機関としてはわずかに駕籠であるという頃に、そこに足をとめては心を籠めて観賞した結実は、わずか五十時間でヨーロッパに飛び、汽車、自動車でヨーロッパをかけることの出来る今のわれわれの鑑賞とは、かけ離れて深いものであるように思われるのである。たまたま私自身の足を頼りにして歩いた土地には、それに似た深い愛着が湧いていたに違いない。

パリを思い出すときに、エッフェル塔よりも、シャンゼリゼの並木よりも、なお強く心に蘇ってくるのは、サクレキユール寺院の裏町であった。

苔がしみ入るように青黒く逼っている家の四階からは、半開きになった錠戸が、片方は朽ちこぼれ、あるいは手すりなどにも落ちかけている家があった。そうした家並みの間を、行き交う人も

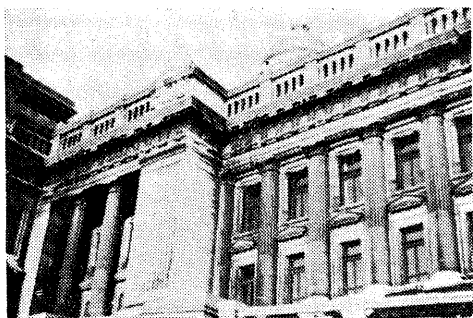
少ない。突然戸口があいて、牛乳の大きな空壺をかかえて出てきた女の人と行き合ったが、彼女は私の方を振り向くこともしなかった。向いの戸口のベンチには、扉を背にして誰かが坐っている。よれよれの上衣を、大きくひろげた新聞紙でかくしている男。それは老人であった。私の靴音に、一瞬読む手を休め、上目使いで私をみたが、再び新聞に目を落してしまった。顔には皺の深く刻まれた貧しげなようすの老人であった。その背からは、古い蔦の大木が、その葉を四階の窓を越えて屋上にまで伸ばしていた。

パリという賑やかな都会の裏町に、自分の靴がコンクリートに響かせる音を楽しむことが出来るような場所があったのである。私はその通りを行きつ戻りつした。このような土地に、細々とした生活を



パリの裏町

た生活を楽しむことができたらどんなにいいだろう。好きな人と、一と間または二の間で簡易な生活をしたたり、



屈托のない疑いを知らない友人たちと、気の向いた時に、ワインの味を楽しみながら話を交すことが出来たら——ようやく東の破風がかげり始め、そこから流れて来る冷たい風を感じながら、私の空想はますます強く迫ってくるのを禁じ得なかった。

マールブルクの城で

空想した若い日本人と、ハンガリア生れの女性とが、結婚したらどうだろう。実はそのハンガリーの女性は、私がヨーロッパ滞在中、二、三の心を惹かれた女性の中の一人であった。丸い顔立ちの中に、深くかかげた目差しは青く、ブロンドのふさふさした髪の毛が、ますますその目差しを美しくした。その女性は、私の大学の研究室にいたが、私とその部屋に入っていくと、静かに立上って、遠慮がちに握手を求めるのであった。

「ドイツがお気に入りまして？」

ほとんど口を交すことがなく、実験を依頼することだけでその部屋を去ったそれまでの機会であったが、ある日、彼女の方から口を開いたのである。

ドイツが気に入ったかという質問は、多くのドイツ人から受けたのであるが、私は即座に「大いに気に入っています」と答えるのが常であった。しかし、その女性からきかれた時には、思わず口籠って、どのように答えてよいかとまどってしまった。

「お答えになりにくいでしょうね。私にもわかりますわ」

「正直、私にはどう気に入っているか、よくわからないでいるのです。そう申上げるより他はないのです……」

「私も、故国から来たときに、しばしばそう感じました。殊に、あなたのお国からでは、いろいろな困難もありでしょうね」

このようなことは、ドイツでの生活では、ほとんど耳にしなかったことばである。ドイツ人が私に尋ねるときには、決って「すばらしいお国です」という答えを期待しているかのようには、強い圧力を持っていた。正直な答えを、どのように表現しようかと思いつ迷っている中に、すぐに別の会話になってしまうのが普通であった。

ハンガリー生れの女性のこのことばは、研究室を出てからも、下宿の部屋に帰っても、私の耳に響き返ってきた。

私は、この女性と、日本の若い研究者との結婚を考えた。二人

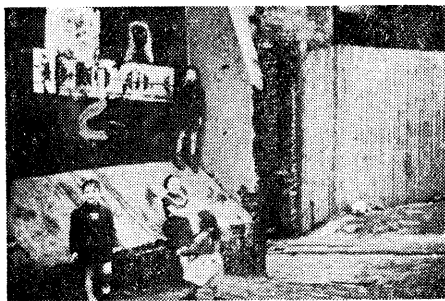
の間には、青い目のうす茶の髪の子どもが生れる。愛くるしい子どもではあるが、——しかし、何か他人から生れたような感じがする、——日本の男には、心から親しむことの出来ない子どもであった。しかし、その三人は、ドイツからパリへ、パリからベルギーのブラッセルへ、何か置き忘れた幸福を求めて迷いの旅路を辿る。ブラッセルにも大理石の大きな宮殿が、小高い土地に聳えていた。その白い殿堂が夕陽をいっばいに浴びて輝いているのは、まさに偉観であった。斜めに見上げると、窓という窓



その裏のスラム街（ブラッセル）

は紺碧の空をうつし
て、ぎらぎらと輝いて
いた。私は、こうした
大きな殿堂を見ると、
それが王宮であつて
も、教会であつても、
いざさかの抵抗を感じ
ずにはいられなかつ
た。いったい、どうし
てこのような建物が必
要なのだろうと。
宮殿の西側には、屋
根から屋根へ、まさに

ブラッセル



いかがわしいはりがみの前で遊んでいる子どもたち

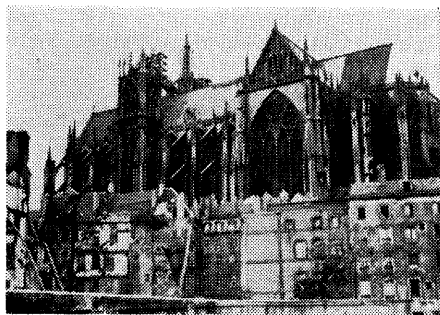
沈もうとする太陽の光
が流れていた。ふと見
ると、宮殿が目の下に
見下す家々は、朽ちた
瓦と破れた壁の家々で
あることに気がつい
た。細い露路には、エ
ブロンをつけた女が二
人、手を振りながら何
か話し合っている。一
人は、痩せていたが、
他の一人は太ってい
た。そのようすが、い
かにも微笑を招くものであつたので、私は二つに折れた石畳の上
を足早に下りていった。
朽ちた壁にさえぎられて、二人の女性の姿は見えなかつたが、
壁にはいろいろないたずら書きがしてあつた。そのいたずら書き
は、決して見よいものではなかつたが、三四人の子どもたちは、
その前で遊びながら事もなげに遊びのルールを言い合っていた。
角を曲ると、戸口があつた。そこに、二人の男の子が新聞を敷
いて、その上にドラ焼のような菓子を二つおき、手にもった方の

一つを食べていた。私がその前にたたずむと、訝がるような目付きで私を見上げたが、一人の子の目が、私の空想した混血児の目差しによく似ていたのである。私は何かはつとした。衛生の習慣とか、子どもの教育とか、うるさいことを言わず

に、このような貧民街で、赤裸々な人間の感情をぶつけ合いながら、貧しい生活をする家族を考えることは、また楽しいことではないだろうか。

フランスとドイツの国境にあるメッツを訪れたときにも、教会の北側、川に沿って貧民街があった。干物がいくつか垂れ下っている二階に、日本人らしい男の人の姿を認めたが、それは中国人のようであった。その男は、二回大きな欠伸をしたあと、いったん奥に引込んだが、今度は子どもを連れて出てくると、黒茶色にすすんだ粗末な椅子に坐って、膝の上の子どもを何回となく愛撫した。それが緑の色を流している川に映るかのようには感ぜられた。

私の空想は、橋桁にもたれた私の心に旅情をかき立てた。美し



メッツの寺院とその北にあるスラム街

いハンガリーの女性。私がドイツにいた頃すでに彼女の故国は風雲急を告げていた。非常に貧しい人々が多いことも伝えられていた。彼女は、次の機会に両親を故国に残して来ていることを私に話した。

「私の父は、今度の戦争で体の自由を奪われました。生活はなかなかたいへんです。そこで私はこの西ドイツに来て働くことになったのです。今、故国に帰りたいとは思いませんが、戦争は私もを本当に不幸に陥れました。殊に両親には気の毒です」

「どうしてお国へ帰りたくないのですか？」と私はたずねた。

「それは、生活ができないからです。幸い、私の国ではドイツ語を話すことに慣れています。私は特に化学の実験と顕微鏡を見る技術を学んだものですから、こうしてドイツでは、職業につくことができのです」

医局の人たちと、あるフィルム工場の工場を見に行ったことがあった。彼女も随伴した。女医さんたちが二、三人いる中で、彼女は特につつましくふるまった。しかし、決していじけてはいなかった。椅子が与えられれば、少しも遠慮なく坐ったし、工場についての感想をきかれると、悪びれずに自分の意見を述べた。

彼女と私の関係は、もちろんそれ以上に発展するはずがなかったけれども、ヨーロッパに生活して深く心に刻まれた土地の印象とともに、いつも思い出す女性なのである。